



余
三
月
廿
五
日
書
入

特 別
又 6
9304
A 4



明治三十四年九月三十一日
延喜集レカ十一日

一代女を評す并原西鶴の理想

不倒忍膏一代女を評して精細に及せり今夫他の例あり
西鶴を見て其理想を評す主世に一ふれども言所別
説の相合ざるも言事ありん

筑水 生



如何に書きついでし玉音もぬり勝ちなり自ら見識ありて
傍たりて時を自ら守り筆の妙あり自ら自然と肝をこたへ其人ま
まきくと過つ心地せしふれ又書きついでる時外あることを忘れ
へる事ありあたることを脇へ行らぬぞうし世に有りとも思ふもぬ
事極み如何やうお表細のみに飾るもこれ將に世人の心を動かすべ
き事ありやれ令なき例へ自ら見たりしこと無きも其事誠ふ
見たりし心念下り筆を自ら鬼神をも動かすつて世の中の實
事最も近きもの我が目撃し我が親密なるまを飾ら

余始めて一代女を讀み、
 實の細緻なる多分、
 三百五十年前我國此作者の
 心から出た一長きとあり
 一を評者の感下にあたり
 ずから寫眞の巧拙の妙を
 外形即ち文章より論ぜざ
 るべし、徒らに讀者の
 の心を奪はせて、評するま
 じや、或人の笑をかへ
 り、此れは極端の所
 余は亦之を存せしむ
 あり

ど能く代女ありといふ字、宋詞の法あり、西鶴あり、字、宋詞
 の韻、韻として、いかに、男女の顔、髪、の結、いかに、眉、毛、の濃、き、薄、き、唇、
 の厚、き、薄、き、小、指、の爪、の平、ら、あ、り、や、も、ほ、細、く、滑、べ、り、人、手、の、膚、
 の、は、く、ら、も、ど、西、鶴、の、眼、を、見、ぬ、水、ぬ、い、り、上、着、の、縞、板、下、着、の、袴、
 様、袂、の、縫、糸、帶、上、の、金、具、の、方、寸、ま、ど、漏、き、透、り、て、諸、君、を、含、笑、
 さ、す、こ、と、腰、に、た、り、如、分、解、い、一、面、取、り、二、面、取、り、の、好、女、の、様、を、詠、
 する、こ、と、何、を、長、き、米、可、通、の、知、ら、ぬ、事、を、弁、く、こ、と、何、を、業、こ、こ、さ、
 淫、婦、の、お、得、ま、き、眼、の、妝、の、生、活、法、能、く、も、新、く、見、ゆ、す、こ、も、
 と、驚、く、ま、堪、え、こ、り、代、女、宋、の、嵯、峨、の、奥、深、き、庵、お、も、ろ、の、白、を、染、ぎ、
 こ、ろ、入、の、女、子、あ、り、て、西、鶴、の、眼、を、映、り、た、る、現、実、の、繪、界、を、打、て、
 一、團、と、い、ふ、自、己、の、精、神、を、加、へ、て、西、鶴、の、イ、ズ、一、たる、当、時、の、反、映、
 下、外、を、い、ふ、ま、ど、其、字、宋、の、詞、の、法、者、筆、の、字、宋、と、異、なり、

二人もく本は無論別
 けり、其れは、其、身、が、い、
 ち、拙、き、あ、ら、ず、い、
 二、人、も、く、本、を、不、完、全、
 にお、り、認、合、的、即、ち、人、間、
 お、り、を、い、ふ、西、鶴、の、説、
 明、的、入、間、か、り、の、お、た、

て波静やと言ふ、作者の、竹見や水底の、新橋、積、む、は、抑、り、
 べ、い、ん、何、の、お、堤、を、破、り、決、水、の、勢、い、を、さ、ち、ど、き、檢、査、を、興、(さ、
 え、や、折、水、の、唯、れ、の、流、く、ま、は、せ、と、亦、お、海、原、を、注、ぐ、波、静、の、お、と、激、
 靜、り、り、と、結、り、の、耕、作、の、り、ん、善、悪、の、意、態、い、絶、え、ん、人、世、の、上、下、行、つ、ら、
 時、至、ら、ぬ、翻、然、と、い、善、道、よ、う、の、佛、果、を、行、く、こ、と、自、然、の、好、態、也、
 西、鶴、の、人、世、を、見、し、こ、と、實、に、お、ま、言、つ、ら、め、是、より、進、む、余、は、今、段、
 上、の、西、鶴、を、見、ん、と、い、代、男、の、地、を、奪、り、代、女、の、身、の、第、一、時、刻、
 心、の、清、く、一、胸、の、蓮、華、は、ら、け、て、嵯、峨、節、の、奥、に、滝、の、音、を、聞、き、
 一、た、ら、自、然、と、言、ふ、ま、ど、の、將、と、不、自、然、と、言、ふ、ま、ど、の、因、り、西、鶴、の、眼、を、
 自然、たり、こ、相、異、あ、け、い、ま、ど、尚、も、佛、果、を、得、ん、と、い、ふ、ま、ど、も、不、自、然、
 流、の、行、跡、を、踏、む、ま、ど、い、ま、ど、い、ま、ど、如何、お、西、鶴、の、心、を、て、放、言、一、條、ま、
 辯、ま、る、ん、然、ら、西、鶴、の、旨、を、い、所、果、と、如何、い、う、流、世、の、強、慾、を、説、

作者の勸懲主義あり
既に知らざるなり
評を見て私か疑ふ
水戸勸懲主義の批
評家ありと云ふやと

お縁の世ありと見せしむれば
代々の其境遇の爲に絶えん也
辨せし所ありは余の改めし言
終之と云ふも寄るをば好
り一所の代々の身の上話
々々大國の男子一淫婦の
墨染めの情信ありと云
の如く船のつりとして道
下黒きんち馬より馬を
記事のみを見ては言ふ之
し也然れや非論又壇の
れども一初稿の本領を
と云ふは、見よ南朝中の
と云ふは、見よ南朝中の

夫れをく本の作者と
の比較もたし、おれや
夫れをく本の作者と自
ら其地位に在りしは
まき、かや、西鶴
まき、かや、西鶴
まき、かや、西鶴
まき、かや、西鶴

其境遇の爲に絶えん也
辨せし所ありは余の改めし言
終之と云ふも寄るをば好
り一所の代々の身の上話
々々大國の男子一淫婦の
墨染めの情信ありと云
の如く船のつりとして道
下黒きんち馬より馬を
記事のみを見ては言ふ之
し也然れや非論又壇の
れども一初稿の本領を
と云ふは、見よ南朝中の
と云ふは、見よ南朝中の

華の也情を言ふと云ふは
とあつた西鶴の之を言ふ
る所、舟の情を言ふと云
下り、彼れを言ふと云
せし所、舟の情を言ふと
也、此れを言ふと云ふは
能く此神髓を言ふと云
情、舟の情を言ふと云
其人や織子、代々の見
次、て微笑みながら冷
眼を天の一方を轉せし
と云ふは、見よ南朝中の
と云ふは、見よ南朝中の

此の書は西鶴の眼力
を以て其の眼力

或は其の眼力
を以て其の眼力

其の眼力
を以て其の眼力

其の眼力
を以て其の眼力

其の眼力
を以て其の眼力

西鶴の眼力
を以て其の眼力

を以て其の眼力
を以て其の眼力

其の眼力
を以て其の眼力

其の眼力
を以て其の眼力

其の眼力
を以て其の眼力

筑水君は西鶴の眼力
を以て其の眼力

其の眼力
を以て其の眼力

全史き一代女と評
 一 崖此自失一たるもの
 ありき也え全史未だ
 西鶴を聊察するに
 明なきよりすんぞ
 あらず今此批評を於
 て論ずべきを不世たわ
 ことどもまだ不世
 心なれ他日大法眼と
 用いて西鶴の眞愛を定
 むるの時あるべし 余
 信ず聖人現れ風月
 二弄を放つし西鶴ハ依
 然として中天を舞久
 二二二

余
 月
 再
 記

聖人現れて風月一弄を放れつらば西鶴果して何ぞぞ

西鶴、第三流子居す
 三流子、何となく水八世
 八の現度及最末の外住ま
 へかび、此義師の次の
 其子於て永代藏を傳す
 るは南り論するまゝあら
 也。

也、又、不、の、情、を、も、秘、藏、の、性、夫、も、Idea、お、於、て、表、し、あ、り、を、南、
 の、バ、ニ、レ、流、む、者、を、一、マ、ス、の、際、下、も、近、あ、り、一、瀟、瀟、の、
 流、を、流、む、人、と、せ、し、む、ら、ん、此、も、代、女、を、流、し、え、ハ、秘、藏、の、眼、パ、ー、と、
 其、子、新、口、主人、公、より、意、を、こ、ら、せ、る、を、得、た、秘、藏、の、性、を、表、し、此、の、
 Republic、の、法、所、職、を、西、鶴、の、Idea、を、於、て、現、世、を、夫、と、す、も、の、無、一、と、
 せ、一、の、者、ハ、表、を、見、出、ん、こ、と、秘、藏、を、一、一、の、内、を、ん、に、あ、ら、を、代、女、
 の、全、面、を、通、じ、て、同、様、を、あ、ら、わ、る、義、を、あ、ら、流、婦、の、骨、と、皮、と、の、如、何、
 とも、あ、り、Idea、を、於、て、ハ、徹、頭、徹、尾、魂、の、魂、藏、の、藏、人、を、一、吐、吐、
 絶、叫、せ、し、む、と、命、の、一、余、之、を、我、國、元、祿、の、同、胞、と、言、ん、と、堪、あ、り、
 寧、ろ、其、利、和、の、助、藏、人、種、が、所、業、を、あ、ら、わ、る、を、疑、ん、と、あ、今、の、
 代、女、を、喝、す、者、何、處、を、見、て、大、誇、又、あ、り、と、稱、す、の、余、ハ、疑、不、彼、
 等、の、多、く、ハ、恐、ら、く、史、想、の、西、鶴、を、あ、ら、わ、る、もの、を、非、の、り、に、況、も、あ、り、

人の眼光に強弱を差
あり如く眼識に高
低を差あり如く事象や
如くまれば人鏡花水
月とやらを他の物と
倒視し如く茶に似たり
似たりと辨別せられ非難
らるゝを免れん之れ或
悲しや事あるも知
又斯く眼光に便りねり
まはす所はねり辨別し
こと世に重んじ重んじ

余の確信を宇宙の義と魂とを二つとすの成りたるものありども其
魂のみを掃いて進路の義を掃く物と掃く詩人の職を掃くを
若くは女の所業も義を合むものありと謂ふ魂も義も一物
あり義も物の実をとり極端の辨別を収るるべきなり詩人
の所業たる者其主として何處までも義あり義を愛
れて詩人たるは彼等可成と全体ありては自然其物の義あり
所謂 *poetical* をとりて詩人たるは其の詩にありては或る物
の女子ヨシ *Modest* といふも *delicate* といふも至るべき自然を
得ることと言ふべし況んや不徳の冷淡と亦不義の枯木死灰と
に去りたる幽霊の一執りたる胸の運葉の余りも至りては頗る
自然の本末を誤らざるなり成程西鶴の本旨よりあるは現世の志

内情と驕傲と
面を以て誇り
其の如くは
見る所のバイン
的なるべき

と説明 眼の光なり
着眼の高下は或
おき眼の光なり
其種の甚程記號伴の
瓜流華ハ共々西鶴より
出てたらしめたり
較して巧拙を而し

内情と *passion* の者人下
等なる、包摂のみの
考へるなり

驕傲の事ハ知らば傳者
以て一言に自然の情性
阻止するなりと断言せし
兄ハ勇氣に在り亦バ
口は強壯を思ひて
或は又ハ問も然る水
の如くは

宇実家其れのみを終らざりし所流石ハ西鶴の平化作者
より其れ以所たりしやしく其故を解る
高大方く自然の現象たるが各自有する快楽あり理想あり
ありては善人も悪人も見る人も同視せらるる三白六
碇四角八何の多角形の現象ハ千リ千々の眼ありて初めて其れハ
映りバインの眼ハ其れ半白のみあり西鶴新うる世の現象を對
して如何なる意見を懷きしとてその彼が眼ハ内情と驕傲と映
りのみ世界は情と内情と傲慢の支配國に止まりし也其時此
なる驕傲と誇りて目より其れ其れ自ら其れ佛者ハ地獄道を説法
して頼る奔流とせんも人業を誇りてんされど人ハ自然の天賦ハ
斯うハ驕傲を以て束縛し得べきも其れ其れ人の心ハ自由あり
其れ其れ不羈奔流や自然の傾向のみ自然の傾向を反對して此
る礼法を講ずるハ自然に向て又其れ其れ其れ知識と争ふもの

して人々を其徳に具
 時面流せしめざるを以
 て勿ちに其れ水の自然を以
 阻正せざるを以て其れ得り
 不の若し古より所謂人
 性又人世の親愛者とし
 云はし人々の意に専ら
 ばりて其れ勉めざるを
 邪と戒りし
 月才子の意を詳解せ

菩薩の命

判断をなすもの幾度の用ひんといふは、肉情の峰先を瀾
 れば物ちも落けて河の益も枯折る身を省みて出家を成
 程の思ひいたれど、何時かの狂ひて止めざるは、此道にこれより
 べ肉情に人肉生のをうけし備はる本性中にて区々法則を設けて
 之を束縛するは、所謂メカニカル、ブルューデンスに流れて木偶人形と
 あり、或は肉君子の善者を出せしめ、宗教家の子の善者家、肉
 善者多きは、この道理をこれに自然なる大悪人の其心を、所ある
 どの善者の心を救う大悪人の掩ふ所あるは、肉善者の善者、其心
 を隠さんとすむ例へば、大理の如く、石碑の如く、表向のみは目
 醒あり、その中に舞妓と化して、不羈の術や、既し人肉
 の自然なり、規矩を設けて自然を救ふとす者、木偶人の肉君
 子の妻の也、瀾たる大河の流るを湛して水魚のや、せきあのてを批め

德政在... 卷之... 第... 册

